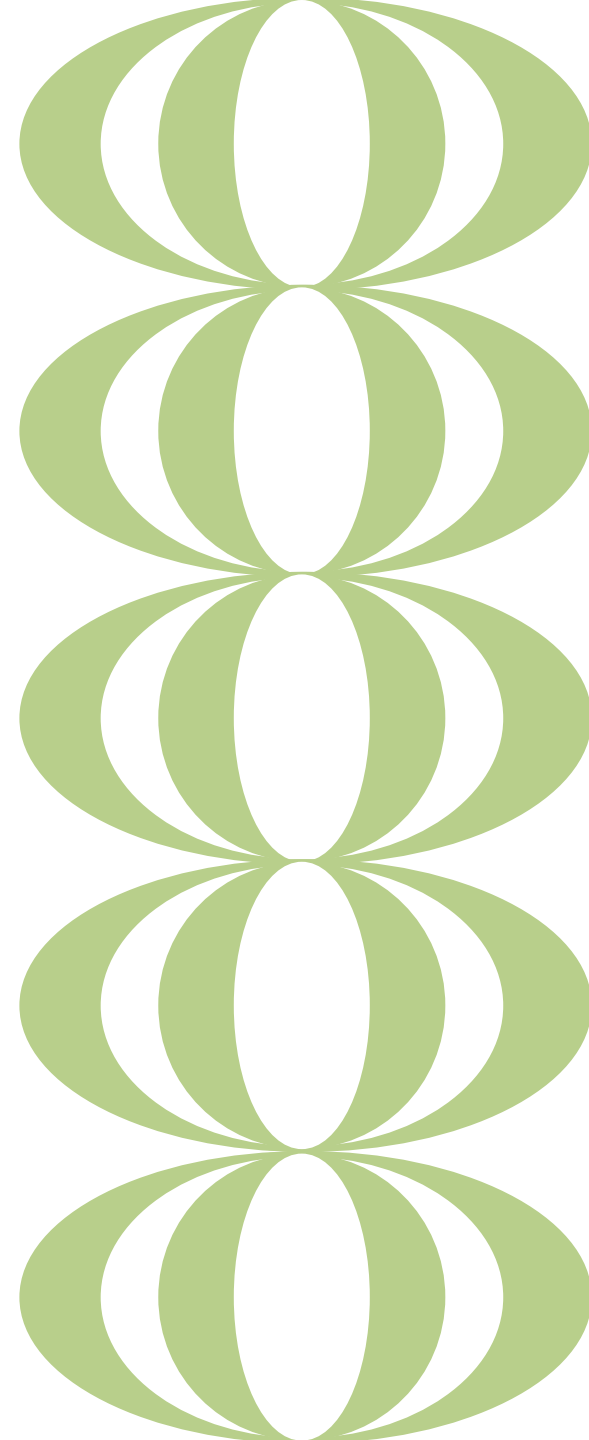


若手の院生・
研究者セミナー

第2部
若手(女性)研究者の研究スタイル
ー苦労したことや工夫したことー

日本大学法学部
山村 りつ





● 自分の研究生生活を振り返って

□ 院生時代

- 回り道の末にたどり着いた場所
- コペルニクスの転回と「論証する」ことの難しさ
- 目の前に目標があり、それに向かって進むだけ

□ 特任助教時代

- 自己評価と結果の乖離に苦悩する
- 目の前に仕事があり、それを実行する日々
- 研究におけるモラトリアムの期間
- 自分の「売り」を意識する

□ 現在の研究生生活

- 職業としての研究者の自覚
- 長いスパンで研究への身の置き方を考える
- 研究の為の資源の獲得を意識する



● 若手研究者としての課題

□ 研究のための資源の不足

- 調査研究の為の知識や技術、ネットワークや協力者、物理的・経済的な限界など、あらゆるものの不足。

□ 時間との闘い


- 博士論文は時間との闘い。計画的かつ確実にステップを重ねていかなければならない。
- 今でも時間との闘いは続く。

□ キャリアへの不安

- 研究の先にどのようなキャリアが期待できるのか、どうすればそれが確保できるのか、研究の進行と同時にぬぐえない不安。

□ 一研究者としての出発

- 院生から研究者への自立。



● 研究の助けになった（なっている）こと

□ 国際的な研究への関わりの機会

- 中央大学（韓国）との交流や、海外の学会参加に対する補助など。

□ TAを通じた訓練

- 考えを客観的に整理すること、伝えること。

□ 人的環境の充実

- 他領域を研究する院生や研究者とのかかわり。
- 指導教官やそれ以外のスーパーバイザー。

□ 切磋琢磨する仲間

- ピアとして
- ライバルとして



● 後輩研究者（院生）へのアドバイス

□ 書くことと見せること

- 書いて人に見せることで鍛錬されていく。
- 恥ずかしくない水準になってからではなく、恥ずかしくない水準になるために、今恥をかく。

□ 「伝え方」・「伝わり方」を意識すること

- 論理や表現が自分本位になっていないか。
- 相手にどう伝わっているかを確認する。

□ 計画と戦略をもつこと

- きちんとした計画が質の高い研究を生む。
- 論文投稿や学会発表だけでなく、研究者間交流や研究費申請も重要な機会として逃さない。

□ 情熱をもつこと

- やりたいと思うことしか続けられない。
- 単発の研究は、長い目でみると業績にならない。